

見えるものと、見えないもの

スピリチュアリティは「命」そのもの。

医師であり精神世界や芸術への造詣も深い稲葉俊郎先生と世界的に有名なサイキックチャネラー、ウィリアム・レーネンさん 双方の見地からスピリチュアルの実態を紐解く。

監修=ウィリアム・レーネン/稲葉俊郎 通訳(ウィリアム・レーネン)=伊藤仁彦 写真=樋口勇一郎 構成・文=染矢真帆

生きる喜びを伝える
あるいは生命力を
呼び覚ます“力”

生きる喜びをもたらす
目には見えないツール

「誰もが誕生したばかりのころには感じていたはずの、生きていく実感、を、再び取り戻すための方法、それがヨガであり、ヨガの精神性なのだと思います。」

あるいは、究極に苦しい状況の中でも生きていけるようにと編み出された、先人の智慧、なのかもしれない」と話すのは、東京大学医学部付属病院循環器内科助教授の稲葉俊郎先生。

どんな人でも人生の中では切実に生きていかなくてはならない時が、いつか必ずやってくる。

例えば家族や大切な人が亡くなる、また地震や津波といった天災に遭うなど、そうした時にこそ役立つのがヨガの精神性なのではないか、と。また、ヨガもそうした生きることに切実に向き合うことが背景となって生まれた人間の智慧なのではないかと推測する。

「ヨガやインド哲学のルーツでもあるヒマラヤは非常に過酷な環境です。極寒の上に、食べ物も十分に得られない。そうした中で、いかに自分の生命力、を活用しながら生きていくのか。その試行錯誤の末に生まれた、非常事態から脱出するための身体技法、それがヨガなのではないかと思えますね。」

凍死しないために、自分自身の内的エネルギーを活性化し体温を維持する。また、消費エネルギーを最小限にするために心拍数を減らす……な

た、すべての人があまねく喜びに至るために何ができるのか、そこを掘り下げていく哲学だともいえるでしょう」と力を込める。

子どものような自由さ
それが生命力の源

スピリチュアリティによって目覚める生命力、その「力」はどこからあふれ出てくるものなのだろうか。私達を「本質的に生かす力」とは、いったい、どこで作られているのか。さらに掘り下げて見ていきたい。

「生命力とは、喜びのエネルギー、そのものといえるでしょう。それは個人に限定されるものではなく、もっと大きな力が動いているものであり、普段感じている喜び以上のものです。」

しかし今は、自分の利益ばかりを気にする、そういう人があまりにも多い印象を受けます。それでは本質的な喜びは得られません」（ウィリアム・レーネンさん）

ウィリアム・レーネンさんが常に発信し続けている「受け取る」というメッセージがあるが、そこから「喜び」に根差したスピリチュアリティが感じられる。

「喜びのエネルギーを自分自身だけではなく、他の誰か、あるいは動物、植物、地球や宇宙に向けてだけで、さらに大きな喜びとなって自分の元に還ってきます。つまり与えれば与えるほど意識が拡大し、それが大いなる喜びとなり、あなたの生命力となるのです。」

ど、ヨガはそうした生きるための技だと思つたのです。同時に、人間の可能性が無限であることを示す、修行者達の表現だったともいえるかもしれません。

このような切実に生きることに直面した人達が積み上げてきた歴史、その「人間学」の中にこそヨガの精神性の本質があると思えますね」（稲葉俊郎先生）

商品化された
スピリチュアル

最近では、至るところで、スピリチュアル、という言葉が聞くようになり、より幅広い層から関心を集めるようになった。しかし、その一方で、現実逃避のためのツール、自己実現に終始して非現実的だ、日常とかげ離れていて非現実的だ、などといった批判的な声を耳にする機会も多くなつた。

そうした現状に対して稲葉先生は、「巷にあふれているスピリチュアルというのは、なんとなく、生きる切実さ、からかけ離れているように感じますね。だから、いまい魂魄が揺さぶられないのではないかと懸念します。いわゆる大量消費社会の中にある商品化されたツールになつてしまつているのではないだろうか」と語る。

食べるものにも、寝るところにも困らない日常は、生きる切実さ、から乖離しているとも考えられる。それはある種、平和な環境ともいえるが、生きていく実感を得られない分、漠然とした虚無感がつきまとう。そ

一方、稲葉俊郎先生も「生命力を突き動かしているものは、ハツラツとした喜びや生命賛歌に似た、いのちの歴史、そのもの」と回答。ヨガを含め、長い歴史の中で脈々と受け継がれてきた、各国に伝わる身体技法からも、その文脈を読み取れると

いう。

「身体技法は生きていくための技であり、同時にそれぞれの環境下でいかにして身体的、精神的な自由（喜び）を得るのかといったことも包括していたのではないかと懸念しています。例えば、インドにはクンダリーニヨガというものがあつます。これは誰もが持つ性エネルギーを頭部へと上昇させるテクニックでもありますが、インドの土地ゆえに必要とされた手法だったのかもしれないですね。」

インドは他の土地に比べて重力が強くなる。そうした状況では、どこかで天とつながりたい、重い場所から抜け出したい、と感じるのは自然な心の動きでしょう。そうした心理が内的エネルギーを上昇させる方法の発見につながり、ついには覚醒という名の自由（喜び）を獲得するにまで発展したのではないのでしょうか」（稲葉俊郎先生）ただ、風土と技術が離れると、使い方を誤る場合がある」と指摘する。

この、人が求めて止まない、自由（喜び）の感覚、は「幼児が持つ感性に近しい」と稲葉先生は分析する。幼児のころは、悩みごとなど皆無で毎日が驚きと発見に満ちあふれ、まさに自由（喜び）の中で日々を送っていたはずだ。それが、自我の芽生

の寂しさや、心の空白を埋める、その場しのぎの商品、としてのスピリチュアルが広まつっているのかもしれない。

「それでもスピリチュアリティに多くの意識が向かうことはとてもいいことだと思えます。」

ただ資本主義的な意図や、誰かの欲望の中に取り込まれないようにすることが、今後ますます重要になつてくるでしょう」（稲葉俊郎先生）

私達は、あらゆるものを生み出す力がある。飢えをしのぐため、あるいは日々を豊かに過ごすべく、多くの物を作り出してきた。そうした物質こそ生きる充実度に直結する、と。ところが、どこかでこれだけでは満足できないことにも気づき始めた。そこで、その答えをスピリチュアリティに見出そうと試みたのかもしれない。

しかし、物質的な生き方が染みついてしまった私達は、仕事での成功や金運アップといった物質社会に根差した利己的で表面的な満足を得るための道具として、その力を商品化してしまつた。そしてスピリチュアルな商品は自分に足りないものを補うツールとして、急速に広まつていった。それは、スピリチュアリティの本質とは異なる、都合のいい魔法のように……。

世界的に有名なサイキック・ヒーラーのウィリアム・レーネンさんは、「スピリチュアルとは利己的な満足を得るためのツールではありません。生きる喜びを伝える、あるいは生命力を呼び覚ます「力」なのです。ま

えとともに、偏見や概念をベースに世界を見るようになってしまつた。そうした視点次第に生命の本質である喜びとのつながりを希薄にしていく……。

「成長とともに、人は世界と初めて接触した時に感じた喜びというものを忘れてしまいます。花や川、海、星、などを最初に見た時は誰もが純粋に感動をしたはずですよ」（稲葉俊郎先生）

しかし、この感覚は、私達の内側から取り去られてしまつたわけではない。記憶喪失のように、忘れていくだけなのだ。であれば、取り戻すことも可能なはずだ。

「瞑想には、いつの間にか身につけてしまつた偏見を取り外し、初めて世界と向き合うかのような純粋な感動を蘇らせるという側面もあると思えます。だからこそ、瞑想には価値があるのではないのでしょうか」（稲葉俊郎先生）

命と切実に向き合つて
見えてくるもの

余命宣告をされると人は、すべてが生きている、という感覚を強く覚えるという。明日、死ぬかもしれない、その緊迫した状況に直面した時、生きとし生けるすべてのものが急に愛おしくなる。今、この時に生きていく実感、その密度が急激に濃くなる……。

「不思議なもので、人間は、命と切実に向き合わざるを得ない状況にまで追い込まれると、自動的に、こうした認識の転換が起こるようですよ。」

切実に生きることに
直面した人達が
積み上げてきた人間学

Yogini special contents

[YOGA IS]

Spiritual work!

Part: 1

4

“幼児が持つ感性”に その最大のヒントが 隠されている…

この、人が命と向き合う時に溢れ出てくるような初々しい感性を取り戻そうとする。それも瞑想の持つ、素晴らしい力だと思えます。でももしかしたら瞑想に限らず、ヨガやその他、世界中に伝わる身体技法もその大元をたどれば、生きる喜びを取り戻す力を秘めているのかもしれない(稲葉俊郎先生)

英語では、アウトサイダー・アートと称され、精神病院の患者、孤独に生きる者、社会不適応者、受刑者：といったあらゆるアウトサイダー達による表現であるとも解釈できる。「彼らは、障害を持っているというだけで、通常の教育システムを受けられず、社会からはみ出さざるを得なかった人々です。だからこそ、人生の中で自分の言葉を編み出さずにはいられなかった。煮え切らない自分の思いを、あまりにも苦しい状況を、どうすれば解放できるのか、そうした切迫した心境の中で生まれたいわば彼らの言語化できなかった言葉、それが「アール・ブリュット」なのだと思えます。つまり、生きるための切実な表現なわけです」(稲葉俊郎先生)

そこには、生きることは何か、といったような生命全体と向き合わせるを得ない真に迫る空気があふれ出ている。そうした生々しい芸術に触れた時、そしてそのバックグラウンドを理解できた時、作品のもつエネルギーに共鳴するかのよう私達の生命力が震えるのかもしれない。しかし、今の社会では多くの芸術が、どこか警沢の対象になってはいないだろうか。「ハインツ・グロウマンの環、あるいは暇を持って余した人々の知的な遊びとしてのアートといった側面が強くなっているように感じます。ピカソの絵が高騰した背景にも、そうした資本主義や投機目的の意図が働いていたのではないのでしょうか」(稲葉俊郎先生)

生きる喜びを揺り戻す力、という視点に立つと、それは宗教的な背景を持つ身体技法だけにとどまらない。「実は、芸術と呼ばれるものにも、その働きがあるのではないかと思うのです」(稲葉俊郎先生)

障害というハンディがあるから「すごいアート」なのではない。もっと、力強い生命力の養いのようなものが、そこには息づいているのだ。ヨガが生き抜くために生み出された身体技法であるように「アール・ブリュット」もまた、そうせずにはいられなかった生命の根源が突き動かした、一つの形なのだ。

けれど、芸術家達が創造したものは、お金を生み出すための作業。ではなかったはずだと稲葉先生は考える。そうせざるを得なかった、いわば心の発露だったのではないかと。そうした、心から生まれた作品に触れた時、私達の内側からは無条件の感動があふれ出す。思考よりも先に感覚が動き出すのだ。圧倒的な力へと導かれるように。それこそまさに、形や形式にとられない、至極シンプルかつ本来あるべきスピリチュアリティのたたくまじといえるのかもしれない。

特に、生命の切実さとリンクしたところから誕生している「アール・ブリュット」には、底知れぬ力が秘められているとか。「アール・ブリュット」とは、フランスで生まれた言葉であり、これはいわゆる既存の美術的な概念、あるいは伝統や流行、教育などに左右されない、内側から湧き上がる衝動のままに表現した芸術のことを指す。

「社会にうまく適応できなかった人の中には、そうした方法を見つけて、れずにドロップアウトした人もたくさんいると思います。その一方で、自分の中に潜む奥深い鉱脈を発見でき、自分自身の言葉を見いだした人もいます。そうした人々の表現からは、芸術の本質が伝わってきます。つまり生きるものが芸術表現そのものなのです」(稲葉俊郎先生)

「世界にはあらゆるスピリチュアルな教えというものがあありますが、本質的にはどれもごくシンプルなものだったはずなんです。それが、人が言葉を使うにつれ、どこか難しく高尚なものとして伝えられるようになってしまったように感じます」(稲葉俊郎先生)

「しかし、赤ん坊のころはすでにその状態を感じて捉えていたはずなんです。それが脳の発達と自己意識の目覚めにより生命の本質から外れるルートを選んでしまっただけなのではないでしょうか。特殊な能力を持った人が特殊な修行を行わないとたどり着けない、そんな特別な境地ではないと思います。そうした言葉はある特定の人達が創り上げた幻想なのではないでしょうか。ただその幻想は、クロードのサークルや宗教を作る上ではものすごく有効な装置として、ある時期は機能していたのかもしれない。しか

し、人間の生命は宗教の概念ではなく、くれないほど広がりがある、限りないものです。それが特殊性をもたせたことで、かえって限界を作ってしまったのではないかと思います」(稲葉俊郎先生)

「世界にはあらゆるスピリチュアルな教えというものがあありますが、本質的にはどれもごくシンプルなものだったはずなんです。それが、人が言葉を使うにつれ、どこか難しく高尚なものとして伝えられるようになってしまったように感じます」(稲葉俊郎先生)

Yogini special contents

[YOGA IS]

Spiritual work!

Part 1 4

「でもそもそもスピリチュアルは規約を必要としません。それゆえ、拒絶や否定さえも生じないんです。そこに息づいているのは、すべての生命を平等に捉える心。そして、それぞれの本質に従って生きることを誰も、何も邪魔をしない、ということなのです。」

「でも、今の社会では多くの芸術が、どこか警沢の対象になってはいないだろうか。」「ハインツ・グロウマンの環、あるいは暇を持って余した人々の知的な遊びとしてのアートといった側面が強くなっているように感じます。ピカソの絵が高騰した背景にも、そうした資本主義や投機目的の意図が働いていたのではないのでしょうか」(稲葉俊郎先生)

「でも、今の社会では多くの芸術が、どこか警沢の対象になってはいないだろうか。」「ハインツ・グロウマンの環、あるいは暇を持って余した人々の知的な遊びとしてのアートといった側面が強くなっているように感じます。ピカソの絵が高騰した背景にも、そうした資本主義や投機目的の意図が働いていたのではないのでしょうか」(稲葉俊郎先生)

「でも、今の社会では多くの芸術が、どこか警沢の対象になってはいないだろうか。」「ハインツ・グロウマンの環、あるいは暇を持って余した人々の知的な遊びとしてのアートといった側面が強くなっているように感じます。ピカソの絵が高騰した背景にも、そうした資本主義や投機目的の意図が働いていたのではないのでしょうか」(稲葉俊郎先生)

「でも、今の社会では多くの芸術が、どこか警沢の対象になってはいないだろうか。」「ハインツ・グロウマンの環、あるいは暇を持って余した人々の知的な遊びとしてのアートといった側面が強くなっているように感じます。ピカソの絵が高騰した背景にも、そうした資本主義や投機目的の意図が働いていたのではないのでしょうか」(稲葉俊郎先生)

「でも、今の社会では多くの芸術が、どこか警沢の対象になってはいないだろうか。」「ハインツ・グロウマンの環、あるいは暇を持って余した人々の知的な遊びとしてのアートといった側面が強くなっているように感じます。ピカソの絵が高騰した背景にも、そうした資本主義や投機目的の意図が働いていたのではないのでしょうか」(稲葉俊郎先生)

「でも、今の社会では多くの芸術が、どこか警沢の対象になってはいないだろうか。」「ハインツ・グロウマンの環、あるいは暇を持って余した人々の知的な遊びとしてのアートといった側面が強くなっているように感じます。ピカソの絵が高騰した背景にも、そうした資本主義や投機目的の意図が働いていたのではないのでしょうか」(稲葉俊郎先生)

「でも、今の社会では多くの芸術が、どこか警沢の対象になってはいないだろうか。」「ハインツ・グロウマンの環、あるいは暇を持って余した人々の知的な遊びとしてのアートといった側面が強くなっているように感じます。ピカソの絵が高騰した背景にも、そうした資本主義や投機目的の意図が働いていたのではないのでしょうか」(稲葉俊郎先生)

「でも、今の社会では多くの芸術が、どこか警沢の対象になってはいないだろうか。」「ハインツ・グロウマンの環、あるいは暇を持って余した人々の知的な遊びとしてのアートといった側面が強くなっているように感じます。ピカソの絵が高騰した背景にも、そうした資本主義や投機目的の意図が働いていたのではないのでしょうか」(稲葉俊郎先生)

「でも、今の社会では多くの芸術が、どこか警沢の対象になってはいないだろうか。」「ハインツ・グロウマンの環、あるいは暇を持って余した人々の知的な遊びとしてのアートといった側面が強くなっているように感じます。ピカソの絵が高騰した背景にも、そうした資本主義や投機目的の意図が働いていたのではないのでしょうか」(稲葉俊郎先生)

「でも、今の社会では多くの芸術が、どこか警沢の対象になってはいないだろうか。」「ハインツ・グロウマンの環、あるいは暇を持って余した人々の知的な遊びとしてのアートといった側面が強くなっているように感じます。ピカソの絵が高騰した背景にも、そうした資本主義や投機目的の意図が働いていたのではないのでしょうか」(稲葉俊郎先生)

「でも、今の社会では多くの芸術が、どこか警沢の対象になってはいないだろうか。」「ハインツ・グロウマンの環、あるいは暇を持って余した人々の知的な遊びとしてのアートといった側面が強くなっているように感じます。ピカソの絵が高騰した背景にも、そうした資本主義や投機目的の意図が働いていたのではないのでしょうか」(稲葉俊郎先生)

「でも、今の社会では多くの芸術が、どこか警沢の対象になってはいないだろうか。」「ハインツ・グロウマンの環、あるいは暇を持って余した人々の知的な遊びとしてのアートといった側面が強くなっているように感じます。ピカソの絵が高騰した背景にも、そうした資本主義や投機目的の意図が働いていたのではないのでしょうか」(稲葉俊郎先生)

「でも、今の社会では多くの芸術が、どこか警沢の対象になってはいないだろうか。」「ハインツ・グロウマンの環、あるいは暇を持って余した人々の知的な遊びとしてのアートといった側面が強くなっているように感じます。ピカソの絵が高騰した背景にも、そうした資本主義や投機目的の意図が働いていたのではないのでしょうか」(稲葉俊郎先生)

「でも、今の社会では多くの芸術が、どこか警沢の対象になってはいないだろうか。」「ハインツ・グロウマンの環、あるいは暇を持って余した人々の知的な遊びとしてのアートといった側面が強くなっているように感じます。ピカソの絵が高騰した背景にも、そうした資本主義や投機目的の意図が働いていたのではないのでしょうか」(稲葉俊郎先生)

「でも、今の社会では多くの芸術が、どこか警沢の対象になってはいないだろうか。」「ハインツ・グロウマンの環、あるいは暇を持って余した人々の知的な遊びとしてのアートといった側面が強くなっているように感じます。ピカソの絵が高騰した背景にも、そうした資本主義や投機目的の意図が働いていたのではないのでしょうか」(稲葉俊郎先生)

「でも、今の社会では多くの芸術が、どこか警沢の対象になってはいないだろうか。」「ハインツ・グロウマンの環、あるいは暇を持って余した人々の知的な遊びとしてのアートといった側面が強くなっているように感じます。ピカソの絵が高騰した背景にも、そうした資本主義や投機目的の意図が働いていたのではないのでしょうか」(稲葉俊郎先生)

「でも、今の社会では多くの芸術が、どこか警沢の対象になってはいないだろうか。」「ハインツ・グロウマンの環、あるいは暇を持って余した人々の知的な遊びとしてのアートといった側面が強くなっているように感じます。ピカソの絵が高騰した背景にも、そうした資本主義や投機目的の意図が働いていたのではないのでしょうか」(稲葉俊郎先生)

「でも、今の社会では多くの芸術が、どこか警沢の対象になってはいないだろうか。」「ハインツ・グロウマンの環、あるいは暇を持って余した人々の知的な遊びとしてのアートといった側面が強くなっているように感じます。ピカソの絵が高騰した背景にも、そうした資本主義や投機目的の意図が働いていたのではないのでしょうか」(稲葉俊郎先生)

「でも、今の社会では多くの芸術が、どこか警沢の対象になってはいないだろうか。」「ハインツ・グロウマンの環、あるいは暇を持って余した人々の知的な遊びとしてのアートといった側面が強くなっているように感じます。ピカソの絵が高騰した背景にも、そうした資本主義や投機目的の意図が働いていたのではないのでしょうか」(稲葉俊郎先生)

「でも、今の社会では多くの芸術が、どこか警沢の対象になってはいないだろうか。」「ハインツ・グロウマンの環、あるいは暇を持って余した人々の知的な遊びとしてのアートといった側面が強くなっているように感じます。ピカソの絵が高騰した背景にも、そうした資本主義や投機目的の意図が働いていたのではないのでしょうか」(稲葉俊郎先生)

「でも、今の社会では多くの芸術が、どこか警沢の対象になってはいないだろうか。」「ハインツ・グロウマンの環、あるいは暇を持って余した人々の知的な遊びとしてのアートといった側面が強くなっているように感じます。ピカソの絵が高騰した背景にも、そうした資本主義や投機目的の意図が働いていたのではないのでしょうか」(稲葉俊郎先生)

「でも、今の社会では多くの芸術が、どこか警沢の対象になってはいないだろうか。」「ハインツ・グロウマンの環、あるいは暇を持って余した人々の知的な遊びとしてのアートといった側面が強くなっているように感じます。ピカソの絵が高騰した背景にも、そうした資本主義や投機目的の意図が働いていたのではないのでしょうか」(稲葉俊郎先生)

「でも、今の社会では多くの芸術が、どこか警沢の対象になってはいないだろうか。」「ハインツ・グロウマンの環、あるいは暇を持って余した人々の知的な遊びとしてのアートといった側面が強くなっているように感じます。ピカソの絵が高騰した背景にも、そうした資本主義や投機目的の意図が働いていたのではないのでしょうか」(稲葉俊郎先生)

「でも、今の社会では多くの芸術が、どこか警沢の対象になってはいないだろうか。」「ハインツ・グロウマンの環、あるいは暇を持って余した人々の知的な遊びとしてのアートといった側面が強くなっているように感じます。ピカソの絵が高騰した背景にも、そうした資本主義や投機目的の意図が働いていたのではないのでしょうか」(稲葉俊郎先生)

「でも、今の社会では多くの芸術が、どこか警沢の対象になってはいないだろうか。」「ハインツ・グロウマンの環、あるいは暇を持って余した人々の知的な遊びとしてのアートといった側面が強くなっているように感じます。ピカソの絵が高騰した背景にも、そうした資本主義や投機目的の意図が働いていたのではないのでしょうか」(稲葉俊郎先生)

「でも、今の社会では多くの芸術が、どこか警沢の対象になってはいないだろうか。」「ハインツ・グロウマンの環、あるいは暇を持って余した人々の知的な遊びとしてのアートといった側面が強くなっているように感じます。ピカソの絵が高騰した背景にも、そうした資本主義や投機目的の意図が働いていたのではないのでしょうか」(稲葉俊郎先生)

そこに息づいているのは すべての生命存在を 平等に、とらえる心

PROFILE
ウィリアム・レーネン
1960年代よりサイキックチャネラーとして、全米のテレビ、ラジオ、教会、企業、大学などで活躍。主な著書に『さらさらオーラで幸せを引き寄せる』(角川書店)、『[つらい過去]を手放す方法』(主婦の友社)、『超スピリチュアル次元 ドリームタイムからのさとし』(徳間書店)、『トビラ』(樺出版社)他、日本での著書は30冊以上。世界各国でワークショップ、セッションなどを積極的に取り組んでいる

PROFILE
稲葉俊郎
いばとらう。医師。東京大学医学部付属病院内科助産。専門は血管の中から心臓の治療を行うカテーテル治療や先天性心疾患、心不全など。東京大学医学部山岳部の監督、瀧沢診療所の所長(夏季限定山岳診療所)も兼任する。週に一度、在宅医療の往診も実施。また、さまざまな伝統医療、補完代替医療、民間医療への造詣も深い